

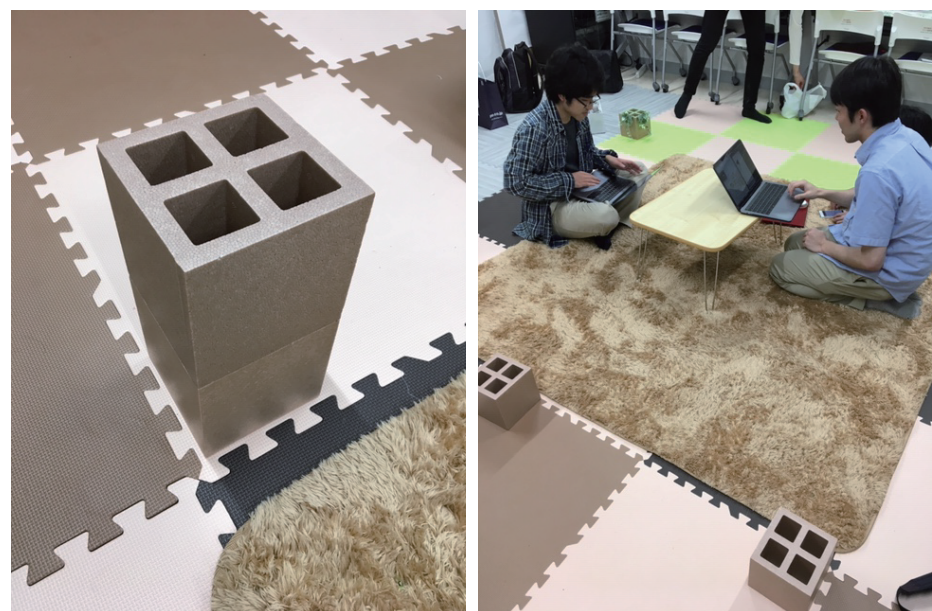
UTa Tané “May Festival 2019” Interior design



Plan (S=1/20)

物語ブース

我々が普段、ただ消費するだけの物語。同様に、普段何気なく使っているカフェをテーマとした。カフェの柱をイメージしたブロックを、この空間のモチーフとした。



リビングブース

私たちの展示では、家のようにくつろいでもらえるように靴を脱いで入っていただく同様にリビングを設けてくつろぎの空間にすると同時に、各ブースを緩やかに仕切っている。

エントランス

色ブース

当たり前前に存在している色。この空間はあえてモノクロとし、色が失われた世界を表現している。破壊されたコンクリートをイメージしたブロックを、この空間のモチーフとした。



アイディアブース

各ブースを体験した後で、最後は皆様に「つくる」を体験していただく。植木鉢をイメージしたブロックを、この空間のモチーフとした。

一人ブース

この空間のモチーフは存在しない。なぜなら、ここでは皆様に空間をつくっていただくからだ。皆様は一人と聞いたとき、いったい何を想像するだろうか？

Introduction

「つくる」ってなんだろう？

日本人の多くは、「つくる」に対して良いイメージを持っていることだろう。なぜなら、日本の経済成長を支えてきたのは、紛れもなく日本の優れた技術なのだから。最近では至る所でイノベーションが叫ばれており、我々は日々、新しい何かを生み出す必要性に駆られているようだ。

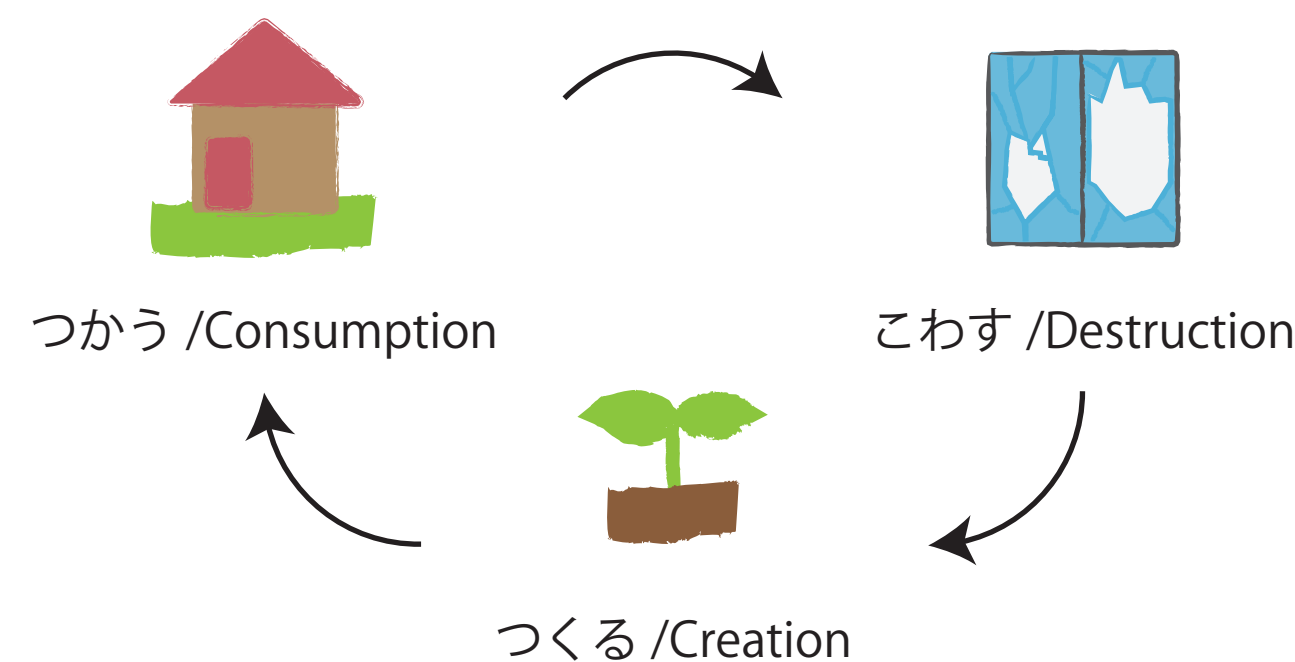
一方で、何かを「つくる」ためには何かを「こわす」段階が存在するということを忘れてはいけない。建築を例に見てみよう。高度経済成長期に団地やプレハブ住宅が大量に建てられたのは、戦争により多くの住宅が失われたからである。また、現在も盛んに行われている再開発の裏には、失われた既存の市街地が存在する。

そして、何かを「つくる」とそれを大切に「つかう」必要がある。建築学者の西山卯三は実際に使用されている建物を調査し、居住者の潜在的な要求を把握する手法を確立した。また、建物の環境や設備などを適切に管理・運用する、ファシリティマネジメントやコミッションングという概念も確立されている。

「つくる」は、「こわす」と「つかう」に支えられているのである。

参考図書 長澤泰編著『建築計画（改訂版）』市谷出版社、2011年

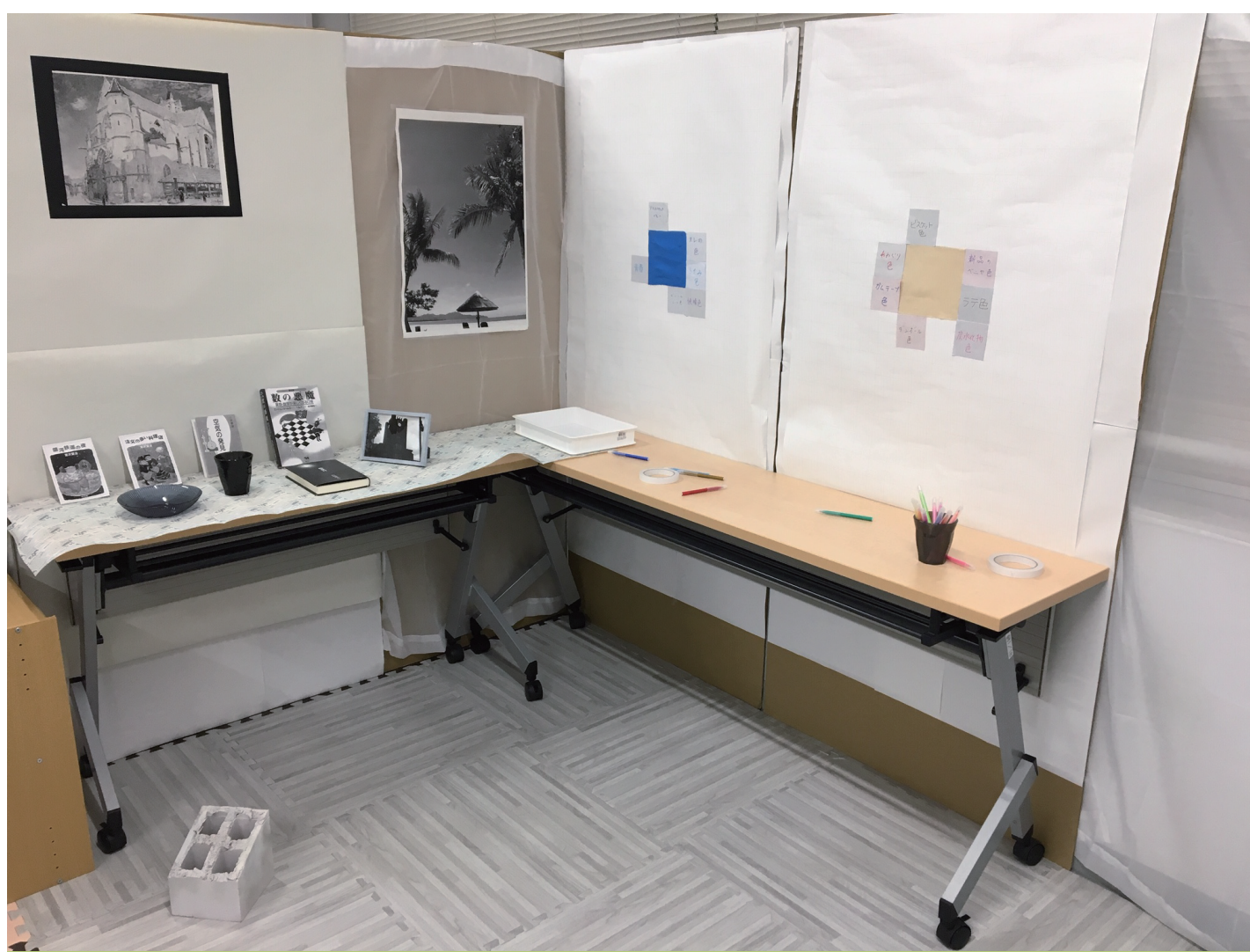
Concept



今回の展示では、この「つくる」の背後にある二つのフェーズに着目し、「つくる」→「つかう」→「こわす」→「つくる」の循環を体感しながら、各作品を体験できるようにインテリアをデザインした。様々な視点で「つくる」を眺めることができる私たちの展示を、皆様楽しんでいただきたいと思います。



本棚やトレイ、絵画などを配置した。カフェボードがポイントである。



モノクロの絵画や本が並んでいる。そこに色をつくり出していく。



植物のようにアイデアが芽生える。



和気あいあいとした作業風景である。